

オオクスノキサマ



松尾
るりえ

絵 中嶋
美穂子

その昔、尾道にしづという女の子がいました。しづは夏のある日、いつものように近所の子供たちと、遊んでいました。もうすぐ夕暮れで、帰らなければならなくなり、じゃあ最後に隠れ鬼をしようということになって、鬼になったのがしづでした。しづも他の子供たちも、橙の光と影とが入り混じる時刻、家に帰りたいような、もつとずつと遊んでいたような、人恋しくてうら悲しい気分になったのでした。その時みんなが遊んでいたのが、良神社でした。鬱蒼とした神社の社は、絶好の子どもたちの遊び場でした。

日頃から、「オオクスノキサマ」と呼んで、慣れ親しんでいた立派なご神木に顔を伏せて数を数えだすと、他の子どもたちは、わーっと蜘蛛の子を散らすように、どこかに隠れてしまいました。人の気配がすっかりなくなつて、もとより訪れる人もまばらな時刻、木々にとまった蝉の鳴く声が、じーんじーんと降ってくるだけで、静寂は一層深まったようでした。

顔を伏せているから、目の前は真っ暗で、しづは急に怖くなってしまいました。それで、余計に大きな声で、急いで二十まで数えて、他の子らを探しに行きました。社の下や、樹のうろ、石段の脇、みんながいそうなどころは、隈なく探して回りました。怖い顔をした狛犬の後ろも、神輿の納められた倉の裏も探しました。しかしいくら探しても、他の子どもたちは見つかりません。

夕暮れはますます深まり、董色の闇が良神社の社を染めていきます。いつまでたっても誰も見つけれなくて、しづは途方に暮れました。もしかしたら、他の子どもたちは、しづがあんまりにも要領が悪いから、隠れ鬼に飽きて帰ってしまったのかも知れません。

しづはどうとう降参して、みんなを大きな声で呼びました。何度も何度も呼びました。けれども、返事は返ってきません。神社の木々が呼び声を呑み込んでしまったかのように、しづが黙ると音という音が消えてしまいました。

た。あれほどうるさかった蟬の声も、いつの間にか聞こえなくなっていました。これはいよいよおかしいと、しづは震えあがりました。

その時です、しづの耳に、なにか、人がささやき合うような声が聞こえたのです。しづはその声の方へと駆け寄りました。声はどうやらオオクスノキサマの向こう側から聞こえてくるようでした。巨大な枝という枝、根という根を互いにかまめた姿は、もはや陽が沈み、暗闇に包まれた中で、まるで巨大な化け物のように覆いかぶさってきます。しづは足をとめ、呼びかけました。すると、ひそひそ話をしていた声は、びたりと止んでしまいました。

しづはオオクスノキサマに関する、昔話を思い出していました。オオクスノキサマには、神様がおられる。そんな、誰が言い出したのやら、他愛のない言い伝えです。神様は長い黒髪の、薄物うすものを着、珊瑚えんじゆのかんざしをした美しい女性の姿をしているとか、あるいは茶色

のふかふかした体に、緑の頭をしているなどと、いろいろ伝えられていました。

息を潜め、オオクスノキサマの傍で耳をそばだてていたしづは、響いてきた声の美しさに陶然とうぜんとしました。それは、一人の声のようにも、大勢が声を揃えているようにも聞こえました。一つのあるいは幾千もの鈴が、あちらこちらで一斉に鳴り響いているような、この世のものとは思えない美しい声でした。名前を呼ばれ、しづは驚いてオオクスノキサマを見上げました。

『しづは鬼

しづは鬼

しづは鬼

見つけてごらん

見つけてごらん

見つけてごらん』

ざわざわざわ、高らかに重なり合い、交じ

り合う声と共鳴きようめいしてオオクスノキサマの枝が揺れ、葉がしゃらしゃらと鳴りました。太い幹に巻きつけられた注連縄しめなわの紙垂しでさえも、ふわりふわりと宙を舞いました。

囁く声は誘いかけているかのようでした。しづは次第に楽しい気分になって、その声に答えました。

「あなたはどこ
あなたはどこ
あなたはどこ」

『私はここ
私はここ
私はここ
見つけてごらん
見つけてごらん
見つけてごらん』

遊びに誘われるままに、しづはオオクスノ

キサマのもとへと向かいました。太くてごつごつしたオオクスノキサマに手をあて、その幹をゆっくりたどりながら、地中から顔をのぞかせた根を乗り越え、進みました。オオクスノキサマの幹の下は暗く、見上げた空はすっぱりとその枝々に囲われていました。しづは転ばないよう、慎重に幹を回りました。けれども、いつまでたっても大樹を一めぐりすることはできません。オオクスノキサマの幹は、大人が十人手をつないでも足りないくらいでしたが、しづがいくら歩いても回りきれないというほど、太くはありませんでした。

首を傾げると、頭上から笑みを含んだ声が次から次へと降ってきました。これはどうやらオオクスノキサマの仕業のようでした。しづはオオクスノキサマの悪戯に、負けじとずんずんずんずん歩きました。太い根も、飛び出す枝も、もう怖くはありません。しづが勇ましく歩いていくと、それを褒め、励ますよう

にオオクスノキサマは枝葉を揺らしました。
そこに一つ、また一つと螢火のような小さな
明かりが灯つていきました。

オオクスノキサマの木の下闇は、きらきら
星を散りばめた夜空のように、輝き始めました。
瞬く星々は、萌え出る若葉の色。その中で、
一際強く光を放つ星に、しづは思わず手を差
し伸ばしました。

「あなたは、そこに」

しづが告げると同時に、辺りに光があふれ
ました。そのあまりのまばゆさに、しづが金
魚柄の浴衣の袖で顔を覆うと、喜びに満ち満
ちた声が頭上から降り注ぎました。

『私はここに』

私はここに

私はここに

しづは見つけた

しづは見つけた
しづは見つけた』

まるで、神社の社の木々のすべてが梢をう
ちならし、身もだえして歓喜に震えているか
のようでした。しづはその音色を、目を閉じ
たまま聞いていました。ずっとずっと聞いて
いました。

どれくらいそうしていたでしょう。いつの
間にか緑の光は消え、木々の奏でる荘厳な楽
の音も鎮まっていました。

『私はここに』

私はここに

私はここに

しづはお帰り

しづはお帰り

しづはお帰り』

オオクスノキサマの声は、最初のささやき

声に戻ってしまいました。しづは名残惜なごりおしく思いながら、来たのとは反対の方へとオオクスノキサマの幹をたどりました。帰りは、行きとは違ってあつという間でした。そして、しづは驚いて目をまあるくしました。

なんと不思議な光景でしょう。良神社の参道まじろの脇わきの灯籠とうろうに、あの、まばゆい緑色の光が列をなして煌々こうこうと灯っていたのです。オオクスノキサマが、しづが道に迷わないように灯して下さったのです。

真まっ直ちかぐに伸びた参道まじろに沿そって、並んだ灯籠。淡い光は、石畳いしたたみにはんのりと反射して、まるで祭りの日のように明るく、楽しげでした。しづは大きく浴衣の袖を振って、オオクスノキサマにお別れと感謝を告げ、その道を帰っていききました。

しづはそれから時折、オオクスノキサマが退屈たいくつしないようにと、お話をしに来ました。

しかし、再びオオクスノキサマがしづを遊びに誘うことは、ありませんでした。しづはそれをさびしく思いながらも、良神社を訪れて、さまざまなことをオオクスノキサマに話すのでした。



